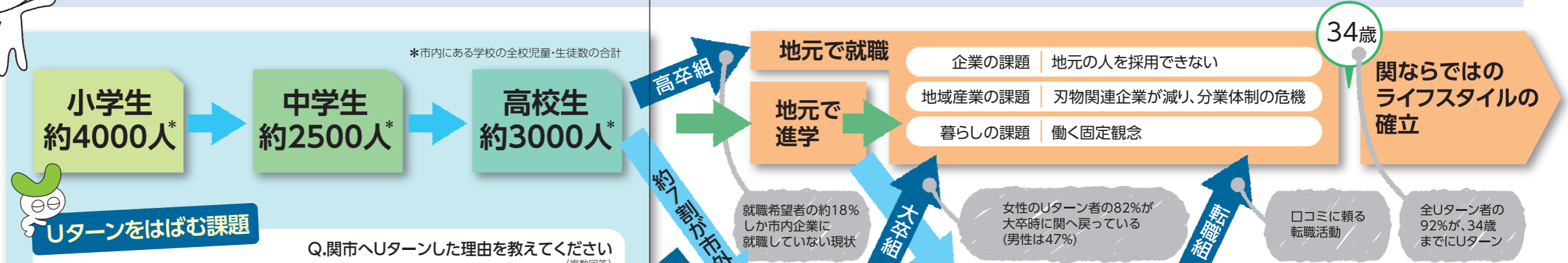


関に若者が戻るために! 今、取り組むべきこと。



関市にUターンして暮らし続けるための問題構造図



調査の概要
平成29年7月から9月にかけて、関にUターンした人、関にUターンしていない人、関の企業、高校生へのアンケートとヒアリングを実施しました。

企画・編集=ぶうめらん編集部

最初に謝っておきます。今回はちょっとお堅い話です。たまには、真面目に関の未来を語ることも、「まちづくりの情報誌」たる矜持ということでご勘弁ください。
私たちがぶうめらんは、その名の通り、関市にUターンしてほしい(ブーメランしてほしい)との思いで活動してきました。しかし、Uターンの決め手は何なのか、何歳でUターンするのか、また「郷土愛があれば、関市に戻ってくる」というのは本当なのかなど、信念はあっても、データがありませんでした。活動が10年を迎え、改めて、その問題の構造とどんな取り組みが必要なのかを大々的に調査をしました。ぜひお付き合いいただいて、関の将来を考える機会にいただければ嬉しいです。

関の子どもたちは、高校を卒業後、約7割が外に出ていきます。その後Uターンした人の92%が、34歳までに戻ってきています。

それを踏まえて大きく2つの時期に分けることができます。一つが、「高校卒業までの関市内にいる時期」、そして、「市外に出たから34歳までの時期」です。

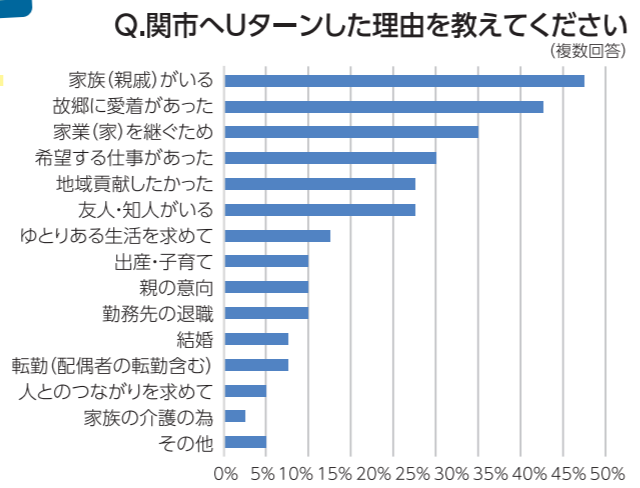
さらに、関に戻るための取り組むべきポイントとしては「高卒時」、「大卒時」、「転職時」の3つがあります。

もちろん、全員に戻ってこいと言うつもりはありませんが、戻って来る可能性のある人まで逃しているのではないのでしょうか。

次ページからは、「関市内にいる時」、「関市外の時」に分けての取り組みを考えてみます。

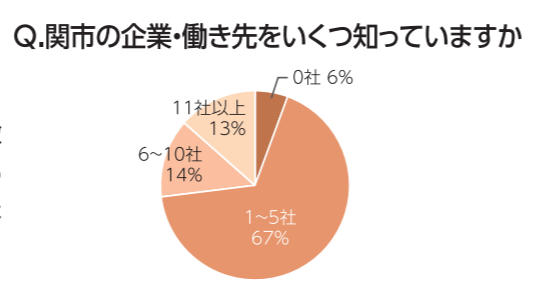
1) 地域を好きかどうか

関市にUターンした人に理由を聞くと、「故郷に愛着があった」と答えた人が「家族(親戚)がいる」に次いで2位となっている。関にいる時期の「愛着」の醸成と、関の外に出た後の愛着の継続が大事。



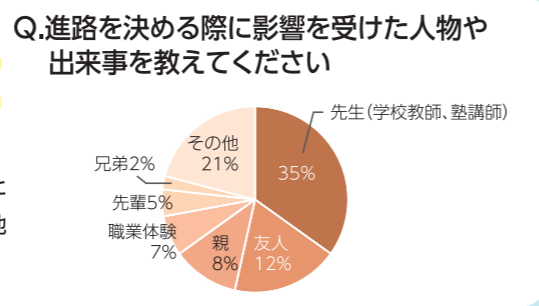
2) 地域を支えている企業やその産業構造を知らない

関市の高校生が関市の企業を知っている数は10社までが87%。これは5166社*ある関の事業所の中で、わずか0.2%しか知らないことになる。



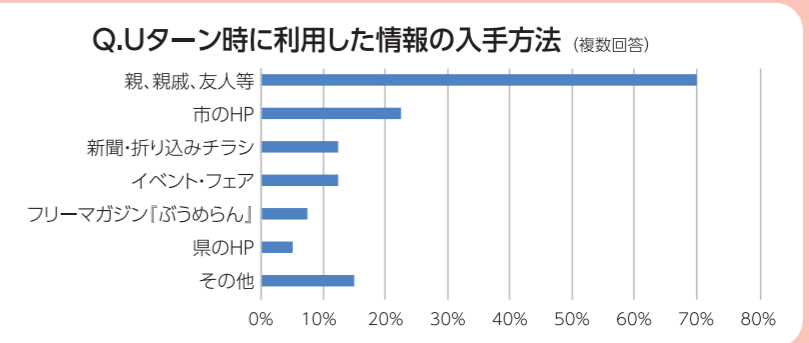
3) 高校時代の進路決定に影響を与えたのは「先生、親、友人」と答えた人が約半数

就業体験や、先生と親以外の地域の人々と関わる経験をする事で、進路の選択肢に地元が入る可能性が高まると考える。



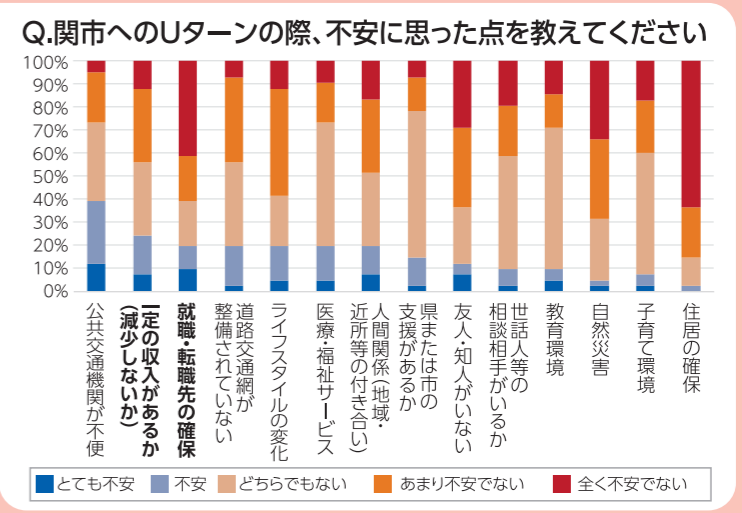
4) 関の情報の遮断

外に出ると関の情報が届かなくなる。Uターンする際の情報入手は「親、親戚、友人等の口コミ」が圧倒的。



5) Uターンの不安の多くは「仕事への不安」

Uターンした人にUターン時の不安を聞くと、上位2位と3位が仕事への不安となった。



6) Uターンに必要なサポートがない

Uターン時の必要なサポートは「就職支援」と「地域になじむ仕組みづくり」だが、現在、両方とも充分でない。